

河井道と遣米使節団

豊 川 慎

1. はじめに

日中戦争開始以来、日米関係は悪化の一途を辿り、1940年9月27日にベルリンで日独伊三国同盟が調印された後には、両国の関係はさらに陰悪化していった。日米開戦が現実味を増す中、日本基督教連盟（National Christian Council of Japan, NCC）は日米戦争回避のために遣米使節団を派遣した。この遣米使節団のうちの唯一の女性団員としてアメリカのキリスト教会と交流をもったのが恵泉女学園の創設者であり教育者の河井道（1877-1953）であった。河井が遣米使節団員として渡米したことはよく知られているものの、遣米使節団それ自体について、またアメリカでの会議とその内容との関連においてはこれまでほとんど論じられてこなかった。その理由の一つには河井自身が英文自叙伝 *Sliding Doors* や『恵泉』巻頭言において会議の詳しい内容について書き記さなかったということが挙げられるだろう。遣米使節団の一員として、はたして河井はアメリカでの会議において何を語りどのような役割を果たしたのであろうか。本稿の目的は恵泉女学園史料室に保管されている河井が残したアメリカでの会議に関する一次資料⁽¹⁾や『福音新報』などの当時のキリスト教新聞の記事を基にして、遣米使節団の一員としての河井道について考察することである。まず初めに、遣米使節団結成

の経緯を概観し、アメリカでの会議の内容、そして使節団員としての河井について順に論じることにした。

2. 遣米使節団結成の経緯

昭和16年2月27日付の『福音新報付録』（第61号）には遣米使節団の発企に関する記事が掲載されている。その「教界ニュース」欄で「米国へ平和使節 堺中央日本キリスト教会の発起」という見出しのもと、次のように記されている。

先般赴任した野村駐米大使に基督教的立場から、強力な支援を送って日米両国民の融和の促進に拍車をかけようとする運動が起こされた。右運動は堺市熊野町にある堺中央日本基督教会によって発企された。同教会では去る〔二月〕十一日夜役員会を開き、日米平和促進を熱望し、十二日朝東京神田の日本基督教連盟宛に『日米危機に対し基督教遣米使節の実現を熱望しこれが資金一千円を送る』旨を打電し、右資金を直ちに電報為替で送り更に日本基督教会大会議長富田満氏に尽力方を請う旨の打電がなされた。忽ち他の方面よりも数千円の資金が寄せられ、計画は具体化しつつある。遣米使節の候補者としては齋藤惣一氏が有力視されている由である。

右計画につき堺中央教会の齋藤敏夫牧師は次の如く語っている。

『日米国交開始以来、精神的物質的に親善の一路を通じてきたが、ここ数年來国際情勢の変化に従って両国に危機が迫った。これは両国にとって大きな不幸である。アメリカには二萬の牧師が居り、一牧師が日米親善を米国の信者五百人に説く時は、全米で実に一千萬人の国民にこれを説く事となり、両国親善促進に大きな拍車をかける事となるので、この際是非日本基督教連盟から遣米使節を送り、米国教師と提携し平和運動に乗出す事を切望してやみません』（『福音新報付録』第六十一号、昭和十六年二月二七日）

上記に引用した『福音新報付録』では、遣米使節の発起が斎藤敏夫⁽²⁾が牧する堺中央日本基督教会によるものであることを伝えているが、特別高等警察（特高）の資料によれば、2月10日に開かれた日本基督教会浪速中会における教会合同に関する協議会において、高知教会の多田素⁽³⁾により「日米関係の險悪化に対し我々教会人は座視するに忍びざるを以て、此の際進んで我々教会より平和使節を派遣し平和工作を行ふては如何」との提議があり、これに斎藤が深く共感したことが記されている⁽⁴⁾。つまり、多田の提議に共鳴した斎藤が翌日2月11日の教会役員会で使節団派遣を発起し、翌朝に日本基督教連盟にその旨を打電したのであった。

都田恒太郎『日本キリスト教合同史稿』によれば、2月15日、日本基督教連盟内の時局奉仕委員会と日米問題考究委員会⁽⁵⁾の合同会議が開かれ、「日米問題を協議するために、米国教会の代表者と日本の教会の代表者とが相会して、両国の平和のために共に祈り協議をする協議会を開くべきである」との決議に達し、北米キリスト教会連合協議会（Federal Council of Christian Churches in North America, FCCCCNA）に打診した。2月26日に「貴会が提議された祈りと協議の会合の開会を心から歓迎する」という返答の電報がアメリカのキリスト教界の代表的な協議会の総幹事たち4名の連名で届いた⁽⁶⁾。会合の場所と日程に関しては、カリフォルニアのリバーサイドにある「ミッション・イン」においてイースターの一週間後にしたいという申し入れがあった。それを受けて、翌日27日、日本基督教連盟は常議委員会を開催して「遣米使節団」の派遣を正式に決定した⁽⁷⁾。そして同日27日、基督教連盟は直ちに遣米使節団の人選に着手し、日本基督教会大会議長の富田満、メソジスト教会監督の阿部義宗⁽⁸⁾、組合教会霊南坂教会の小崎道雄⁽⁹⁾、霊南坂教会の会員で国会議員の松山常次郎⁽¹⁰⁾、そして連盟総幹事の都

田恒太郎⁽¹¹⁾の名が挙げられた。しかし、富田は合同教会の創立準備委員長に推挙されたばかりであるゆえにこれを固辞し、代わりに高知教会の多田素を推薦した。都田も合同準備委員会の書記であるがゆえに辞退したため、使節団の幹事役に齋藤惣一⁽¹²⁾が選ばれ、連盟名誉幹事のW.アキスリング⁽¹³⁾が英文幹事として齋藤を補佐することになった。合同準備委員会の議長には阿部義宗、副議長には小崎道雄、会計には松山常次郎がそれぞれの任にあたっていたこともあり、教会合同に向けたこの重要な時期に彼らが遣米使節団のメンバーとして渡米することに対しては反対意見もあったが、最終的には、阿部、小崎、松山の派遣が承認された。さらには賀川豊彦と河井道が選ばれ、上記8人の代表団に、小川清澄⁽¹⁴⁾と松山常次郎の息子松山望の二人の随員の合計10人の顔ぶれが決まった⁽¹⁵⁾。

都田は『日本キリスト教合同史稿』の中で、日本基督教連盟が遣米使節団の人選に関して内閣情報局と連絡を取っていたことに触れてはいないが、特高資料によれば、使節団の人選に関して内閣情報局の意向も反映されていた。『特高資料による戦時下のキリスト教運動2』によれば、当初、派遣使節として久布白落実、木村清松、千葉勇五郎の名が挙がっていたが、内閣情報局は久布白を「外国依存観念濃厚」、木村を「挙措軽薄にして失言の恐れあり」、そして千葉を「親米派なる等幾多好ましからざるものあり」と見なして使節団候補から除名した模様であることが記されている⁽¹⁶⁾。

遣米使節団の一員としての河井道の人選に関しても触れておきたい。特高資料には使節団員候補としての河井に対する内閣情報局からの反対意見は見られない。既述のように、日本基督教連盟の役員である富田、阿部、小崎、松山、都田の5氏の名前が最初に挙がり、その後の人選の中で河井が選ばれたのであったが、河井がどのような経緯で誰による推挙によって使節団に選ばれたのかは資料によって跡付けられないために

不明である。しかし、河井は当時のキリスト教界を代表する女性キリスト者であり、彼女ほど英語で流暢に講演できた者はいないと言われるほど英語が堪能でもあったため、彼女が選ばれたのは自然の流れであったことだろう⁽¹⁷⁾。そもそも河井は1937年に日本基督教連盟の5名の代表団のうちの唯一の女性として中華基督教協進会の集会に派遣されたことがあった。それは7月7日に盧溝橋事件によって日中戦争に突入するわずか数か月前のことであり、河井は上海や南京に滞在し、中国のキリスト教指導者たちと交流の時を持ったのであった。それゆえ、日本基督教連盟の使節団の一員として河井が再び選ばれたということであろう。

河井の英文自叙伝*Sliding Doors*の記述によれば、彼女が日本基督教連盟による遣米使節団の招請を受けたのは3月初めであった⁽¹⁸⁾。連盟総幹事の都田が恵泉女学園の河井を訪れ、遣米使節団の一員となってくれるよう懇請したが、河井は恵泉女学園での仕事が多忙ゆえ、一度はこれを固辞している⁽¹⁹⁾。しかし、河井は「大いにためらい不安を感じつつも」(with much hesitation and trepidation) 最終的には基督教連盟の求めに応じ、招請を受諾したのであった⁽²⁰⁾。1941年3月の『恵泉』巻頭言には「3月のしらせ」と題して次のように書いている。やや長くなるが引用したい。

何とめまぐるしい日々の連続であろう。『恵泉』を執筆する暇がまったくない。(略) さて河井はこの次に何をと問う人があると、来る二七日、もう一週間で渡米すると返事する。(略) いったい何のための渡米かといえは、第一に申したいのは、決して政府から派遣されるのではない！また米国から経済上の世話になって行くのでもない。すべてが日本基督教連盟の計画で、連盟が責任を負い、費用全部を基督教関係の日本人個人から出資するのである⁽²¹⁾。目的についてはすでに新聞紙上にも紹介されたようだが、ここに私から連盟より発表されしものを^{あらた}更めて紹介しよう。

「我が国全基督教会を代表する日本基督教連盟は日本に於ける基督教新体制の確立を機とし東亜に於ける伝道の将来に関し殊に日米両国基督教会に関連する諸問題につき、これが解決のため、昨年十一月の総会に於いて特別委員会を設置し研究中のところ、今回右に関し意見交換のため米国側より招請し来ったので之に応諾⁽²²⁾、左の代表者を渡米せしむこととなった。(昭和16年3月14日)

高知教会牧師	多田素
日本メソヂスト監督	阿部義宗
霊南坂教会牧師	小崎道雄
教会連盟常議員	松山常次郎
青年会同盟総主事	齋藤惣一
	賀川豊彦
恵泉女学園長	河井道子

以上の次第で、一行はただ基督教の立場より協議するので外に何の使命を持つわけでない。(略) 謙遜を学び、誠実に交わり、「主キリストに在りて一つ也」の真実を新たに味わえば、そうして次の時代を背負う若人に、己れ以外に世界のあることを知らしめ、愛は死よりも強きを悟らしめ、建設に向かって大きな霊力を持つ者たらしむの一助ともなるならば、今回の出立も無意味ではあるまい。(略) 何をなすべきか、何処にゆくかはしらない。出帆は三月二七日の鎌倉丸で、船中にて一行は祈りつづけてゆく。協議も船中である。なにとぞ諸兄妹の絶えざる祈祷をもって一行を助けられんことを願うのである」⁽²³⁾。

上記引用の「巻頭言」には渡米する直前の河井の気持ちがよく表れている。日米関係が険悪化する中、日本人キリスト者としてアメリカのキリスト者達と祈りを共にし、相互理解を深めることに自己の使命を感じ、主に信頼してすべてを委ねて渡米せんとの思いが窺い知れる。

以上、遣米使節団派遣の経緯を見てきたが、『福音新報』に掲載された使節団に関する記事をさらに順を追って概観していきたい。昭和16年3月12日付『福音新報』（第2347号）の「個人消息」欄に遣米使節団の今後の動向が次のように記されている。「多田素氏 来る二七日横浜出帆の新田丸にて渡米六月下旬帰朝の筈 齋藤惣一氏 同上 松山常次郎氏 同上 小崎道雄氏 同上 河井道子女子 同上 松山望氏 同上随員として渡米 賀川豊彦氏 同上四月五日横浜出帆の平安丸にて渡米 阿部義宗氏 同上 小川清澄氏 同上随員として渡米」⁽²⁴⁾。報じられているように、多田は3月27日に他の一行とともに横浜を出帆するはずであった。しかしながら、高知から上京する直前の3月24日午前零時に急逝した⁽²⁵⁾。使節団団長として渡米するはずであった多田の逝去により、急遽、阿部義宗が団長を務めることになった。

3月26日に遣米使節団の送別祈祷会が東京神田のYMCAにおいて行われたが、これは前日から開催されていた第8回教会合同準備委員会の際に催されたものであった⁽²⁶⁾。翌27日、河井一行は鎌倉丸で出帆し、4月4日朝にホノルルに到着。河井は出帆後の最初の三日間は船酔いのために床で過ごし、その後は読書や手紙の執筆、そして研究会や懇談の時を過ごした⁽²⁷⁾。ホノルル到着後、河井は使節団一行と離れてYWCA関係者や旧知の友人に会って食事を共にした後、21時半に船に戻り、22時にホノルルを出帆した。4月11日、サンフランシスコに寄港し、翌12日、小崎、河井、松山、齋藤、アキスリングの使節団一行を乗せた鎌倉丸は13時半にロサンゼルスに到着した。河井は恵泉女学園にかつて留学していた日系二世10人ほどに迎えられ、ロサンゼルスのホテルにその夜は宿泊。翌13日のイースターにはハリウッドにある野外音楽堂ハリウッド・ボール（Hollywood Bowl）に行き、3万人余りが集うイースター早朝礼拝に参加した。河井はその時の印象を「決して忘れられない経験の一つ」（one of the never-to-be-forgotten

experiences) と書き記している⁽²⁸⁾。

6月12日付の『福音新報』において「遣米使節の動静」として、別便の阿部義宗、賀川豊彦、小川清澄の一行も平安丸にてシアトルに上陸後、汽車で4月20日朝にロサンゼルスに無事に到着したことが伝えられている。またアメリカに滞在中の湯浅八郎⁽²⁹⁾が使節団一行に合流した。

3. 「リバーサイド会議」

カリフォルニア州リバーサイドにある「ミッション・イン」において4月20日から25日までの6日間、日米の代表者による会議が開かれた。この「リバーサイド会議」は日米の代表者たちが共に祈ることを主眼とした「祈祷協議会」(prayer conference) という性質のものであった。小崎道雄によれば、国際宣教協議会 (International Missionary Council, IMC)⁽³⁰⁾ の総幹事ワンシウス (A.L. Warnshuis) がこの会議の準備に最も尽力し、例えば、アメリカ国務省は日本からの使節団を決して歓迎しておらず、むしろ迷惑に感じていたが、彼がしばしば国務省に足を運んで同省の理解を求めたという。ワンシウスを中心とするアメリカ側の周到な準備と好意とに対して小崎は驚嘆と感謝の思いを吐露している⁽³¹⁾。

「リバーサイド会議」は午前9時、午後2時、午後9時の一日三回行われ、毎回祈りと奨励をもって開始された。阿部義宗と北米会衆教会総幹事ダグラス・ホートン (Douglas Horton) が共同議長を務め、北米教会の代表的人物17名がアメリカ側代表者として会議に出席した⁽³²⁾。

リバーサイド会議では何が話し合われたのであろうか。小崎は「北米基督教会実状に対する私見」と題した論稿の中で「日本の合同教団の事、政治と宗教との関係、宣教師の此度の問題等が主なる話題であった」⁽³³⁾と述べているように、主な議題は「神社参拝問題」と「日本基

「基督教団の設立」に関してであった。

昭和16年6月12日付の『福音新報』（第2358号）に掲載されている長谷川計太郎による「米国加州に開かれたる日米教会代表協議会－米誌に現はれた開会前の下馬評と会後のニュース」と題する報告記事によれば、日米代表者会議前の4月2日付の『クリスチャン・センチュリー』には神社参拝問題や日本の新たな合同教会とそれに伴う宣教師の引き上げ問題ゆえに日本のキリスト教界に対する疑心や批判が紙面上に表れていた。しかし、会議後の5月7日付の『クリスチャン・センチュリー』ではリバーサイド会議の大まかな内容が伝えられ、日本に対する一定の理解を示す論調になっていることを長谷川は紹介し、「吾らは更らに詳細なる会議内容の発表と米国側列席者自身の所感とが同誌上に現はれん事を待ち望むものである」と結んでいる⁽³⁴⁾。

では実際にどのようなことが話し合われたのであろうか。リバーサイド会議の議題の一つは神社参拝問題であったが、その点に関して、“Riverside Conference Creates Better Understanding”と題する米国側の会議報告では次のように記されている。

この会合から大きい理解が生まれたことはその討議報告より明らかである。例えば、阿部監督は日本の国家神道の神社で行われている儀式に関する日本人キリスト者の態度について説明した。日本側は、国家によって保護された愛国的神社（patriotic shrines）と宗教的神道の神社（religious Shinto shrines）との相違を指摘し、国家神道の神社で行なわれ、キリスト者が参加する儀式は、愛国的であっても宗教的ではない、と説明した。彼らは、キリスト者は宗教的神道の神社における儀式には参加しない、と言った。米国側は、神社問題について日本のキリスト者としてふさわしい行為がどのようなものであるかということは、日本人キリスト者が決めるべきことである、という見方に傾いていった⁽³⁵⁾。

この会議報告から明らかなように、阿部はいわゆる「神社非宗教」論を繰り返し説明したのであろう。アメリカ側代表団にしてみれば、「国家によって保護された愛国的神社」と「宗教的神道の神社」の相違という上記のような説明では、神社参拝の問題を十分に理解し、納得できるはずもなかったことであろう。この点に関して、土肥昭夫は、米国側は「日本側の詭弁に満ちた説明にさじを投げたのかもしれない」と論じ⁽³⁶⁾、また古屋安雄もかつて『日本の神学』の中で次のように指摘した。「キリスト者の神社参拝は愛国的行為であって宗教的なものではない、という日本側の説明にたいして、アメリカ側はこの問題は日本人キリスト者自身が決定すべきものと批判をさけているが、理解し賛成した、とはいっていない。ここに見られるのは、いわゆる「甘え」の構造である。子は母に甘えて、不合理なことは承知の上で、わかってくれるはずだと、自分に都合の良いように解釈した意見を述べる。母は母で、この苦しい立場に同情して、結局は許してしまう、といった関係が、母教会であるアメリカ側と、子教会である日本側の間に見られるからである」⁽³⁷⁾。

リバーサイド会議では合同教会の問題、つまり「日本基督教団」の成立についても話しあわれた。同上の会議報告の中でこの点に関して次のように記されている。「主要な問題の一つとして問われたのは、米国諸教会と二八の教派を統合して新しく組織される日本基督教団との関係であった。この合同教団の生活と実践に他国のキリスト者が貢献する重要な余地は存在するだろうという確証が与えられた。阿部監督は、帝国憲法が信教の自由を保障していること、政府は教会の教理に干渉したこともなく、またその意向もないことを指摘した」⁽³⁸⁾。

アメリカのキリスト教界では「神社問題」と「合同教会問題」に関して以上のように報告されているが、ではこのリバーサイド会議は日本のキリスト教界にはどのように伝えられ、どのように受け止められたの

であろうか。

1941年6月5日付の『基督教世界』に掲載された「日米教会指導者によるリバーサイド会議 終始友好的に進行」と題する報告において、上記の二点に関して次のように報じられている。

この会議を開くに至らしめた事情のうちには、日米両国間の国際的危機、日本に於ける新合同教団の設立等があり、かかる事情より結果した宣教師の大量引揚のことなどがあり、これらの問題が会議に於て熱心に論ぜられたことは勿論である。

新合同教団に就いては、合同準備委員会議長たりし阿部監督がその成立の経緯、新教団の性質等詳細に述べて、米国側の蒙を啓くところがあったが日本に於ける基督教会が近来努力し来った点は、自給独立して外国より来る掣肘より脱せんことと、基督教の一致を実現せんことである旨が強調された。

宣教師問題に就いては、当分は不確定であるが将来に於ては新合同教団の傘下にあつて外国宣教師は伝道者として働くならば多くの働き場所があり、歓迎せられるであらうという日本側の意向が明らかにせられた。アメリカ人の理解に甚だ困難な日本に於ける神社問題に就いても十分な説明がなされ、相当程度の理解が与へられた如くである。政治上の問題に就いてはどの程度までの話合ひがあつたか、一切此の点に就いては発表されてゐないので不明である。

此の会談によって得られた収穫のうち最善のものは、恐らく、日米両国から甚だ有力なる影響力を有する教界の代表的人士を一堂に会せしめ、彼らが基督者として充分に知り合ふことを得たという一事であろう⁽³⁹⁾。

『基督教世界』に掲載された上記の報告では、神社参拝問題に関して「アメリカ人の理解に甚だ困難な日本に於ける神社問題に就いても十分

な説明がなされ、相当程度の理解が与へられた如くである」と記されているが、実際には既述のように、この問題に関してアメリカ側とは大きな認識の隔たりがあったと言わざるを得ない。

リバーサイド会議の最終日に、日米の代表者が日米共同の声明を公表した。1941年6月5日付の『基督教世界』はその大要を次のように伝えている。

本会議の最終日に満場一致の下に可決して声明を発したがその大要は左の如きものである。

「世界を昏くする衝撃と破壊と恐怖の暗雲の下にあつてわれらは相会した。重くせられ、卑くせられたる心を以て、われらは絶えず、世界の各所にあつて、人々を苦しむる悲哀と苦難とが存することを意識せざるを得なかった。世界の此の悲劇に対する責任の一端を負へることを思ふてわれらは赦しを乞ひ願ひ、神の聖旨を知り且つ実行し得んがために上よりの光と力とを祈り求めた。

われらの間を隔つる隔ての中籬を毀ち給ひしイエス、キリストに於てわれらの平和は見出されたことを証し度い。

今や正に出現せんとしつつある日本基督教団と米国の諸教会との間に相互的な信任が強められたことは神に感謝すべきことである。この新しき聯携に依つて力が増し加はり、理解がいよいよ進めらるるであらうと期待するのである。

今回の会談に於けるわれらの経験に依つて新しくせられたる一つの確信は、如何に世界を脅やかす困難なる問題も、もし各国の指導者達がキリストの精神に於て相会しそれを処理するならば、克服し得られぬ障害は存し得ぬといふことであつた。

われらは、神のみ前にて愛の奉仕と忍耐と世界の凡ての国民との融和とを誓つたわれらは同信の友に呼びかけてわれらと共に神の聖旨へ再び自己

を奉獻なすことと、勝利は必ずキリストのものなることの確信を確保することと、キリストに忠実に従ふことは決して無駄なることに非ざることの確信を失はざること等に、一致せんことを慫慂するものである。更にわれらは祈りに於て友たらんことと全世界の主にある兄弟姉妹に此の交りに加はるべく招き入れんことをおごそかに誓約したことであった」⁽⁴⁰⁾。

『基督教世界』以外にも6月19日付の『福音新報』が「日米両教會代表が公表したる共同メッセージ百パーセント親善的」と題して日米教会の共同声明を掲載している。『福音新報』に掲載されたものは、5月7日発行の『クリスチャン・センチュリー』誌に掲載された英文の共同声明を長谷川計太郎が訳出して載せたものである。『基督教世界』に掲載されたものと比べると短い大要ではあるものの、内容は同じである。

4. 「リバーサイド会議」後の遣米使節団

リバーサイド会議後、4月26日にロサンゼルス合同教会において伝道集会が開かれ、翌27日もオクシデンタル大学の講堂において伝道集会が行われ、そこにおける婦人大会で河井が講演を行っていることは分かっているが、講演内容に関する資料は残念ながら残されていない。

リバーサイド会議後、ニュージャージー州アトランティックシティーにおいて5月9日から11日まで、またシカゴで5月29日から31日まで同様の会議が行われた。

恵泉女学園資料室にアトランティックシティーでの会議のプログラムが所蔵されている⁽⁴¹⁾。それによれば、5月9日金曜日午後8時から初日の会議がジェファーソン・ホテルで開かれ、祈祷の後、J.W.デッカー (J.W. Decker) 議長による挨拶、C.T.レバー牧師 (rev. C.T. Leber, D.D) による歓迎スピーチ、阿部義宗による答礼、そしてリ

バーサイド会議の報告が斎藤惣一、河井道、A.L.ワンシウスによってなされ、午後9時半に散会となっている。会議2日目の10日土曜日は午前、午後、そして夜と三回にわたって会合が開かれた。午前中の会議は朝9時から始められ、賀川豊彦が30分間のデボーションの時間をリードし、9時半から議長による声明、それに続いて阿部と小崎による「合同教会」(The United Church)に関する説明とそれに対する質疑応答が11時半まで続き、その後は「日本における神社問題」(The Shrine Question in Japan)について松山常次郎が説明し、12時に閉会している。午後の会議は14時から開かれ、「合同教会と北米諸教会の間の将来の宣教関係」(Future Missionary Relationships between the United Church and the churches of North America)について阿部とルーマン・シェーファー(Dr. Luman J. Shafer)による説明が行われ、質疑応答の後、16時半に閉会。夜の会合は19時半から開かれ、「現在の宣教状況」についてW.C.フェアフィールド(W.C.Fairfield)と阿部による報告と質疑応答がなされた後、河井道が9時15分から15分間のデボーションの時間を担当し、9時半に閉会している。翌5月11日は日曜日であり、10時より共に礼拝の時間を過ごしている。礼拝を担当したのはL.S.ルーランド(rev. Lloyd S. Ruland, D.D)と阿部義宗であった。午後の会合は14時から開かれ、「東アジアにおける現在の宣教計画と諸問題の日本の教会との関係」(Relation of the Japanese Church to current missionary plans and problems in East Asia)と題して斎藤惣一より14時半まで報告がなされた。14時半からの会議ではプログラムに「Special Problems in Chosen」と記されているだけであり、どのような問題が論じられたのかは分からない。報告担当者として松山常次郎、W.アキスリング、そしてJ.J.ホッパー三氏の名が記されている。16時半よりJ.H.アーナップ(rev. J.H. Arnap)によるデボーションの時間が持たれ、17時に閉会とプログラムには記されている。

以上がアトランティックシティーのジェファーソン・ホテルで開催された会議プログラムである。プログラムからも分かるように、主な議題はリバーサイド会議と同様に、日本の合同教会、神社参拝、そして宣教に関する日米教会間の問題についてであった。河井がこの会議でリバーサイド会議の報告とデボーションを担当したことはプログラムから判明するものの、実際のところ具体的に河井が何を語ったのかは残念ながら資料が残されていないため分からない。

5月29日から31日まで今度はシカゴで会議が開催された。「シカゴ会議」ではどのようなことが議論されたのであろうか。リバーサイド会議やアトランティックシティー会議と同様、シカゴ会議の公式な記録は残されていないが、ワンシウスが「個人的な覚え書き」(personal memoranda)として記した資料が残されているのでそれを基に会議の内容を概観したい⁽⁴²⁾。

シカゴ会議に出席したアメリカ側の代表者はR.P.バーンズ (Roswell P. Barnes), P.C.ジョンストン (Paul C. Johnston), R.E.ディッフフェンドファー (Ralph E. Diffendorfer), S.S.リオン (Sarah S. Lyon), E.ロス (Emory Ross), L.J.シェーファー (Luman J. Shafer), W.ファン・カーク (Walter Van Kirk), A.L.ワンシウス (A.L. Warnshuis) の8名であった。バーンズは初日のみ、ディッフフェンドファーとロスは二日目と三日目のみの参加であった。

ワンシウスによる「覚え書き」によれば、シカゴ会議初日は日本側使節団から受けた印象について率直な意見が交わされた。そして2日目は「神道の儀式」(Shrine ceremonies) に関して議論が行われた。アメリカ側は日本のキリスト者達がどのように神道の儀式と折り合いをつけているのかよほど理解に苦しんでいたようであり、日本側使節団に詳細な説明を求めている。また神社参拝問題に関連して、日本のキリスト教会と朝鮮および台湾のキリスト教会との関係に関する次のような問題

もアメリカ側から提起された。例えば、外国人宣教師たちが台湾から引き揚げなければならない状況が指摘され、それに対して日本側代表団は速やかに対応すると応じている。また満州における日本軍と日本政府当局の行為との関連で日本基督教連盟の責任に関して問題提起がなされている。また中国における宣教の働きに関しても議論され、例えば、日本軍に支配されている地域では中国人に伝道することは不可能であり、これらの地域では中国人への伝道ではなく、日本人と日本軍人に福音を伝えることに専念すべきだという意見がアメリカ側から出されている。

他の主題はリバーサイド会議同様、「合同教会」の問題であった。アメリカのミッション・ボードは日本の新合同教会との宣教協力の継続を望んでいるが、今後日本での宣教師の働きがどのような状況になるのか、この問題は喫緊の問題であるとして日本側に詳しい説明を求めている。また、新たに成立する合同教会への挨拶として今度は日本にアメリカの代表団を派遣することが望ましいとの意見が出された。そして「覚え書き」には次のような興味深い一文が記されている。「その〔日本へのアメリカ側〕代表団には一人の女性を含めることが最も望ましいであろうということが述べられた」(It was stated that it would be most desirable to include a woman in such a delegation)。これは遣米使節団の唯一の女性であった河井のアメリカでの働きが高く評価されて出された意見と言えるのではないだろうか。ワンシウスは、日米の代表者が率直に深く話し合うことによって互いへの信頼と相互理解が深められたとその「覚え書き」を結んでいる。

以上、ワンシウスが記した「覚え書き」に基づいて、シカゴ会議で話し合われた内容について概観してきたが、話し合われた主題のみが簡単に記されているだけであり、誰がどのような発言を具体的にしたのかは残念ながら不明である。しかし、シカゴ会議では上記の問題が繰り返し日米双方の代表者たちの間で議論されており、アメリカ側が何を憂慮

していたのかということは明らかである。

河井がシカゴ会議で何を語ったのかは分からないが、シカゴ会議2日目の30日、会議の合間の昼食時に恵泉女学園宛ての手紙の中で次のように書き記している。「さて、今回の使命は果たせたか否かは神にお任せいたします。苦しみもありましたが、喜びと感謝の方が幾倍もありますので、参って良かったと常に思います。大きな場所にての演説の方が個人的の会合よりも寧ろやさしいものなりとの感は時々致しました。米国のリーダースは仲々深く考えています。日本も深く考えて国際的に目を向けなくてはなりません。ますます学園の教育にもこの方面をも振張せねばならぬことを教えられました。あまり我らは教育でも社会関係でも、ある殻に立てこもり、広い高い見地を忘れると、次の国民に済まないことであります。ともかく広いとか、狭いとかは、神中心か、あるいは自己中心かによって定まるものであります」⁽⁴³⁾。

シカゴでの会議を終えた後、賀川と河井以外の使節団は日本基督教団の創立総会に間に合うよう6月5日の船でアメリカを出帆した。6月19日付の『福音新報』（第2359号）では阿部、小崎、松山、齋藤、そしてアキスリングの5氏の「個人消息」として6月20日に横浜着の龍田丸にて帰朝したことが報じられている。そして、6月23日午後6時半より東京青年会館において、遣米使節団の帰朝歓迎会と報告会が開催され、阿部、小崎、齋藤、松山、アキスリングが報告演説を行った⁽⁴⁴⁾。翌6月24日、25日、富士見町教会において日本基督教団の創立総会が開催され、統理者に富田満、統理者代務者に小崎道雄が選出された。その後、同日25日午後7時より東京神田、一ツ橋共立講堂において日本基督教団創立感謝大会が開催されたのであった⁽⁴⁵⁾。

5. 「リバーサイド会議」後の河井道

シカゴでの会議後、河井は他の使節団一行の予定にあわせて帰国はせず、米国各地で講演を行い、旧知の友人と旧交を温めた。遣米使節団としての公的な役割を終え、帰朝するまでの一か月ほどの北米滞在期間には、例えば、カリフォルニアのミルス・カレッジより名誉人文学博士号を授与され⁽⁴⁶⁾、また高齢となった恩師スミス (Sarah C. Smith, 1851-1947)⁽⁴⁷⁾ をバサデナに訪問している。

4か月間のアメリカ滞を終えた河井は7月5日、かつての恵泉留學生の多くに見送られながら、サンフランシスコを鎌倉丸にて出帆。ホノルルを経由し、7月20日、雨が降る横浜に上陸した。恵泉女学園からの代表者の歓迎の中、帰京し、7月21日、恵泉で全校挙げての大歓迎会が催された⁽⁴⁸⁾。

帰国後、河井は京都の教会でこの度の渡米に関する報告会を行った。河井が何を語ったのか詳細は明らかではないが、*Sliding Doors* の記述によれば、例えば、武力による解決以外にも国際紛争を解決する方法はあるということを河井は語ったようである。報告会では憲兵が目を光らせており、河井はそのことを承知したうえで大胆に語ったのであったが、報告会の直後、「治安錯乱の恐れあり」として河井は京都の憲兵隊本部に連行され、取り調べを受けている。その時の憲兵とのやり取りが *Sliding Doors* に記されているが、そこから報告会の内容を明確に知ることはできない。

河井は帰国後の8月に、自身の遣米派遣を振り返って、YWCAの機関誌『女子青年界』雑誌部の4名によるインタビューに対して次のように答えている。「私共一行が行ったからとて其で戦争が予防出来るとは其はいへませんよ。教会がいくらあつたつて昔から戦争はあつたのと同

じですものね。ただ教会がこれまで平和を絶えず主張して来なかつたら、米国は或はもつと早く参戦したかもしれぬという事は誰でも言へると思います。ルーズヴェルト大統領や他の参戦派の人達も、教会の力で引きとめられ、参戦を抑えられて今日に至つてゐるのです。(中略)政治家以外に非戦論を唱えるのは教会と婦人です。ドクター・オブ・リヴオリューション以外の婦人は非戦派とみていいでせう」⁽⁴⁹⁾。「とにかく今度の訪米は期間も短かつたし、いろいろの制限があつた上に萬事教会中心なので、其以外の事はよく知らないため十分お答えが出来ず残念でした」⁽⁵⁰⁾。このインタビューは8月22日に上記4名が河井宅を訪れて行ったものであるが、このインタビューからも河井が遣米使節団の一員としてアメリカでの会議において具体的に何を語ったのかを知ることは残念ながらできない。

米国から帰国して2カ月後に記した、「帰朝後の私」と題する『恵泉』巻頭言では次のように記している。やや長くなるが引用したい。

今度米国に派遣されたことは、自分の再教育であつた。何を彼地でなし得たか否やは、その批評は他に任せ、今後我々は神の御名のため、祖国のために何をなすべきかにつき熟考し、実行しなくてはならぬとの責任を痛感した。(略)

時局下東京は落ち着きなく、ややもすれば渦中に巻き込まれる思いがする。(略)とかく我々には不可抗力のこの時局下において、ただ心を落ち着けて日々の仕事を忠実にするよりほか仕方がない。(略)

雨に始まり雨に終わりし夏休みは、多くの問題を我らに投げ掛けた。八月中教員会もひらかれ、全校生徒を招集し、報国隊の組織を語り、国難に対する覚悟を強め、真面目に将来を考えつつ新学期を迎えたのである。人々が米国にての経験や見聞を語れなどと迫っても、今日の場合、もはや時節おくれの思いがして、それよりこの先をいかにすべきか、我らクリスチャ

ンとし、また教育に責任あるものとして進むべき道、国家に尽くすべき責任、若き者の指導法、自己の精神鍛錬等を思うと一日が短か過ぎる気分がし、心のみ忙しくなるのである。このさい聖書にあるごとく暴風に船出し、逆巻く波間に翻弄する小舟の中で静かに憩われしキリストのあの勇ましい信仰と平和とを上より与えられんと祈りつつ進んでいきたいとの願いをもって新学期に向かおうと決心した。

物質豊かな米国に旅客としてあるよりは、今や未曾有の国難に直面して、一億一心の祖国の方がやっぱり安住地であるとの感は、日本人として当然のことであろう。（「帰朝後の私」『恵泉』第97号1941.9）

おわりに

既述のように、シカゴ会議ではアメリカの代表団を日本に派遣することが話し合われたが、11月18日に日米開戦となり、それは実現しなかった。しかし、1945年の秋、つまり終戦からまだ数週間という時に、アメリカのキリスト教界は戦前の日本の遣米使節団への答礼としてJ.C.ベイカー、D.ホートン、L.シェーファー、W.ファン・カークの4人の代表団を送った。既述のように、彼らは皆、戦前にアメリカ側代表として日本の遣米使節団を迎え入れた人たちであった。河井が*Sliding Doors*で記している言葉を用いれば、4人の代表団は「日本におけるキリストのわさを再建するための第一歩として何をなすべきかを調査するという目的をもっていた」⁽⁵¹⁾。代表団は日本のキリスト者指導者たちと会い、また日本の各分野の代表的人物や連合軍高官とも会い、可能な限りの情報を集めて帰国した。河井は次のように書いている。「協議会の4人の代表者は帰国後ただちに、日本の現状についての報道を忠実に、かつ速やかに広めることによって、日本国民の苦しみを軽減し、日本におけるキリストのわさを再建しようと、クリスチャンとしてのあらゆる種類の

活動に先鞭をつけた。彼らの訪問の直接の結果として、多くのキリスト教主義学校が教授陣にアメリカ人の教師を加えることができたが、恵泉もそうした幸運な学校のうちにふくまれていた」⁽⁵²⁾。

日米戦争回避のために日本基督教連盟から遣米使節団が派遣されたのであったが、戦争回避という点で言えば、使節団はその歯止めにはなり得なかった。遣米使節団はしばしば「平和使節団」として言及される場合があるが、実際には、神社参拝問題や合同教会の説明に苦慮し、成立間近の合同教会についてアメリカのキリスト教会側の理解を得ようとすることに傾注した様子が資料から読み取れる。神社参拝問題や合同教会の問題に対してアメリカ側に説明したのは主に阿部義宗や松山常次郎であり、河井自身がそれらの問題に対してどのような見解をもっていたのかということは明らかではない。戦後に執筆した*Sliding Doors*の中で、アメリカ側から提起された「多くの鋭い質問に対して答えられないまま、また多くの問題が未解決のまま残された」(Many searching questions and problems were left unanswered and unsolved)⁽⁵³⁾と書いているが、それらが具体的にどのような質問や問題であり、それらに対して河井自身がどう考えているのかということは書き記していない。これまで論じてきたように、河井がリバーサイド、アトランティックシティ、そしてシカゴでの会議に於いて何を語ったのかということに関する詳細は明らかではないが、河井は4か月間のアメリカ滞在中に大小多くの集会に出席して講演を行い、日米親善に尽力したことは明記されるべきであろう。

本稿の最初で述べたように、本稿の目的は恵泉女学園史料室に保管されている一次資料をもとにして遣米使節団派遣の意義とそこにおける河井道の役割を明らかにすることであった。河井の講演原稿などの一次資料の存在を期待していたものの、残念ながら、期待していたほどには一次資料がなく、結論的には、使節団として河井が何を発言したのかと

いうことにして詳細はいまだ明らかではない⁽⁵⁴⁾。河井が残した膨大な手紙にはアメリカ側代表者達と交わした手紙も含まれている。それらの手紙類を読み解くことが今後の河井道研究の課題であろう。また本稿で論じたように、国際宣教協議会（IMC）の総幹事ワンシウスがリバーサイド会議の準備に最も尽力したがゆえに、ジュネーブのWCCに所蔵されているIMC資料やワンシウスに関する資料調査を通じて、遣米使節団としての河井道について更に明らかにすることができるものと思われる⁽⁵⁵⁾。

注

- (1) 恵泉女学園資料室には恵泉女学園関係資料とともに河井道関係資料が所蔵されており、河井道関係資料の目録掲載件数は約2400件（書簡約1600点を含む）にのぼる。恵泉女学園史料室編集・発行の『恵泉女学園史料室所蔵資料目録 その1』が2014年11月に発行されているが、本稿ではこの資料目録に記されている資料番号を資料名と共に記すこととする。
- (2) 斎藤敏夫（1892-1969）：大衆伝道者、聖書画家。東京神学社を卒業。堺中央キリスト教会を中心に54年間、教育と伝道に携わった。多くの聖画を描いて伝道に用い、また文書伝道団「ともしび社」を設立。『日本キリスト教歴史大辞典』（教文館、1988年）参照。以降の人物注に関しても同辞典を参照。
- (3) 多田素（1867-1941）：日本基督教会高知教会牧師。明治学院神学部を卒業後、植村正久の一番町（富士見町）教会で2年間伝道師を務めた後、高知教会牧師に招聘。
- (4) 同志社大学人文科学研究所・キリスト教社会問題研究会編『特高資料による戦時下のキリスト教運動 2』新教出版社、1972年、57-58頁。
- (5) 1940年（昭和15）11月26日から27日に日本基督教連盟の第18回連盟総会が開かれ、「日米問題考究委員会」の設置が決議。委員は千葉勇五郎

- を委員長、都田恒太郎を幹事とし、阿部義宗、小平国雄、村尾昇一、齋藤惣一、額賀鹿之助、松山常次郎、山本忠興、今井三郎、益富政助、C.W. アイグルハート、T.D.ウォルサー、G.ボールズ、ガントレット恒の面々であった。都田恒太郎『日本キリスト教合同史稿』教文館、1967年、252-255頁
- (6) それはS.M.カバート (S.M. Cavert, General secretary of the Federal Council of Christ in America), E.M.ロス (E.M. Ross, General secretary of Foreign Mission Conference of North America), A.L.ワンシウス (A.L. Warnshuis, General secretary of the International Missionary Council), そしてW.W.ファン・カーク (W.W. Vankirk, General secretary of the Commission on Justice and goodwill)各氏の連名であった。都田, 上掲書, 254-255頁。
- (7) 都田, 上掲書, 252-255頁。
- (8) 阿部義宗 (1886-1980): 牧師, 教育者。青山学院 (経堂緑岡) 教会牧師, 及び同大学教授, 院長を歴任。メソジスト教会第6代監督。
- (9) 小崎道雄 (1888-1973): 日本組合基督教会霊南坂教会牧師。日本基督教団の創立時に統理者代務者に選出。
- (10) 松山常次郎 (1884-1961): 1920年から終戦まで衆議院議員。外務参与官, 海軍政務次官を歴任。霊南坂教会会員。日本基督教団成立後は常議員, 財務委員。
- (11) 都田恒太郎 (1897-1983): 経堂緑岡教会名誉牧師。日本基督教連盟総幹事を務める。
- (12) 齋藤惣一 (1886-1960): 日本キリスト教青年会 (YMCA) 同盟総主事。戦後は引揚援護院初代長官, 国連引揚特別委員会日本政府代表, 国際基督教大学建設実行委員長, ユニオン神学校客員教授などを歴任。
- (13) W.アキシリング (William Axling, 1873-1963): アメリカ・バプテスト教会宣教師。日本において社会福祉事業にも貢献。戦時中, 浦和に収容され, その後交換船で帰国。戦後に再来日し伝道に従事。
- (14) 小川清澄 (1886-1954): 東京松沢教会牧師。賀川と共に平和運動にも献身。
- (15) 都田『日本キリスト教合同史稿』255-258頁。
- (16) 同志社大学人文科学研究所・キリスト教社会問題研究会編『特高資料

による戦時下のキリスト教運動 2』新教出版社, 1972年, 58頁。

- (17) 生前の河井道をよく知る古屋安雄先生からかつて伺った話では、河井ほど当時の日本のキリスト教界で英語に堪能であった人はいなかったという。
- (18) Michi Kawai, *Sliding Doors*, 恵泉女学園, 1950年, p.9 [河井道『スライディング・ドア』恵泉女学園1995年, 21頁]。
- (19) この時の様子を一色義子は次の論稿の中で詳細に記している。一色義子「河井道」四竈揚・関田寛雄(編)『キリストの証人たち 抵抗に生きる3』日本基督教団出版局, 1974年, 所収, 103-107頁。
- (20) Michi Kawai, *Sliding Doors*, p.9 (21頁)。
- (21) 都田恒太郎『日本キリスト教合同史稿』によれば、遣米使節に関する経費は日本のキリスト教界関係者からすべて集められ、約7万5千円となった。その大半は『主婦之友』社の創設者石川武美(1887-1961)による寄付であり、あとは高知教会、西陣教会、堺教会、霊南坂教会、日本メソジスト教会本部がそれぞれ5000円ほどを寄付し、また諸個人の寄付金に加えられた。都田恒太郎『日本キリスト教合同史稿』教文館, 1967年, 259頁。
- (22) 米国側からの打診ではなく、日本側から米国側に打診したというのが正しい。
- (23) 「3月のしらせ」(1941.3) 河井道『『恵泉』巻頭言集』恵泉女学園, 1999年所収, 240-243頁。
- (24) 『福音新報』昭和16年3月12日付, 第2347号。
- (25) 3月27日付の『福音新報』は一面においてその訃報を伝えている。
- (26) 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室(編)『日本基督教団史資料集 第1巻』(日本基督教団出版局, 1997年), 306-307頁。
- (27) 「なつかしきお声-河井先生より」『『恵泉』巻頭言集』, 244頁。
- (28) Michi Kawai, *Sliding Doors*, p.9 (22頁)。
- (29) 湯浅八郎(1890-1981): 同志社普通学校, カンザス農科大学, イリノイ州立大学大学院で学ぶ。同志社第10代総長に就任するも、同志社神棚事件, チャペル籠城事件, 勅語誤読事件などにより総長排斥運動が起こり、辞任。アメリカ各地で世界平和のために公演を続け、戦後は同志社総長

に再び就任。国際基督教大学学長を歴任。

- (30) 国際宣教協議会は世界の宣教運動に関する諸問題を協議する国際機関として、1910年のエディンバラ世界宣教会議後の1921年にニューヨークで結成された。国際宣教協議会の会長はJ.R.モット (John R. Mott, 1865-1955),そしてワンシウスは総幹事であり、ロンドンに事務局を置いた(『日本キリスト教歴史大辞典』516頁)。モットが来日の際には河井が通訳を務めることが多く、河井はモットから多くの影響を受けた。1938年のマドラス会議に河井は出席しているが、それにはモットの強い勧めがあった。
- (31) 小崎道雄「北米基督教会実状に対する私見」『新興基督教』1941.9, 38-39頁。
- (32) その陣容は次の通り。D.ホートン (北米会衆教会総幹事), J.C.ベーカー (メソジスト教会カリフォルニア州教区監督), A.F.デー (北米基督教会連盟副会長), R.P.バーンス (北米基督教会連盟主事), R.L.パウエン婦人 (南カリフォルニア教会婦人教会会長), L.F.ディッフエンドファー (メソジスト教会外国伝道局局長), G.M.フィッシャー (サンフランシスコ日米協会副会長), P.C.ジョンストン (北米長老教会外国伝道局局長), K.S.ラトゥーレット (エール大学教授), S.S.ライアン (YWCA外国部主事), E.M.ロス (北米外国宣教協議会総幹事), L.J.シェーファー (アメリカ・オランダ改革派教会外国伝道局幹事), B.スチーブンス (聖公会ロサンゼルス監督), A.トラウブリッジ婦人 (北米基督教会協議会婦人協力委員), A.L.ワーンシャイス (国際宣教協議会総幹事), A.R.ウェンツ (ゲティスバーグ・ルーテル神学校校長)。6月19日付の『福音新報』(第2359号)の「教界ニュース」欄に上記の米国側代表の名前と肩書が紹介されている。
- (33) 小崎道雄「北米基督教会実状に対する私見」, 上掲書所収, 39頁。
- (34) 『福音新報』昭和16年6月12日付, 第2358号。
- (35) 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室(編)『日本基督教団史資料集 第1巻』日本基督教団出版局, 1997年, 193頁。
- (36) 土肥昭夫『天皇とキリストー近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察』新教出版社, 2012年, 453頁。
- (37) 古屋安雄・大木英夫『日本の神学』ヨルダン社, 1989年, 154頁。

- (38) 『日本基督教団史資料集 第1巻』, 193-194頁。
- (39) 『基督教世界』昭和16年6月5日付
- (40) 同上
- (41) 資料番号 A3 (2) -27, 資料名「FOREIGN MISSIONS CONFERENCE OF NORTH AMERICA COMMITTEE ON EAST ASIA」恵泉女学園史料室所蔵。
- (42) 資料番号 A3 (2) 2-23, 資料名「MEMORANDUM」恵泉女学園史料室所蔵。
- (43) 「婦心矢の如し」『『恵泉』巻頭言集』250-251頁。
- (44) 特高は遣米使節団の帰国及び帰国後の動静を注視しており, 例えば, 歓迎会席上での使節団の報告内容を特高資料から知ることができる。『特高資料による戦時下のキリスト教運動 2』新教出版社, 1972年, 58-62頁。
- (45) 『福音新報』6月26日, 第2359号。
- (46) 『福音新報』も「個人消息」欄で河井が「去る九日挙行の米国オークランドのミルス女子大卒業式に列席, 同大学から文学博士の学位を授与されし由」と伝えている。『福音新報』7月3日, 第2361号。
- (47) サラ・クララ・スミスはアメリカ長老教会の婦人宣教師であり, 1880年に東京の新栄女学校に赴任するも多湿の気候ゆえにリュウマチを患い, 北海道での療養の後, 札幌で全寮制のスミス女学校（現北星学園）を創設し, 多くの人材を育てた。河井はスミスの最初の聖とのうちの一人であった。『日本キリスト教歴史大辞典』, 334, 733-734頁。
- (48) 『恵泉女学園五十年の歩み』, 恵泉女学園, 1979年, 153頁。
- (49) 「河井先生との対談記」『女子青年界』第三十八巻第九号, 一九四一年 恵泉女学園資料室委員会（編）『河井道子文集』所収585頁。
- (50) 同上, 587頁。
- (51) Michi Kawai, *Sliding Doors*, p.120 (197頁)。
- (52) 同上, 198頁
- (53) Michi Kawai, *Sliding Doors*, p.10 (23頁)。
- (54) 一色義子先生に伺った話では, 河井は講演をする時に簡単なメモを用意するだけで, 完全原稿を準備しそれを読み上げるといことはしなかったという。

(55) この点に関しては紀要査読委員会の講評に負っている。感謝の意を表したい。

(謝辞：本稿を執筆するにあたって恵泉女学園史料室の方々，特に室員の大町麻衣さんには資料の閲覧と複写のために大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。)